

台湾技術協会と八田與一

木更津高専 正会員 武長 玄次郎

1. はじめに

八田與一は(1886-1942)は、1920年から30年までの10年をかけて完成した台湾南部の大規模水利施設、嘉南大圳事業の中心人物として、台湾では有名な人物である。日本でも台湾に関心を持つ人々や技術関係者だけでなく、広く知られるようになってきた。だが、八田の活動は当然嘉南大圳だけではない。様々な事業、組織に関与しており、それについても研究されるべきである。今回は、八田が関わった台湾技術協会について触れることにする。

2. 台湾技術協会

この台湾技術協会は、今日あまり知られている団体とは言えない。日本語で見つかる研究論文としては、蔡龍保による「日本統治時代後期における台湾技術協会の設立とその事業-台湾島内の研究, 調査活動を中心に-」1本があるのみである。

台湾技術協会は1936年(昭和11年)に設立された。前年に設立された日本技術協会(1920年設立の工人倶楽部が元となっていた)と組織、理念において共通するところが多い。法科万能と言われ技術者の冷遇が続く状況に反発し、団結して技術者の地位向上を目指し、合わせて情報交換や交流も目的であった。満州事変から日中戦争、ひいては太平洋戦争に続く時局は技術者が重んじられる条件を作り出しており、戦争を利用して地位向上の目的を果たすもくろみもあったであろう。だがあくまでも「技術報国」などのスローガンで戦争協力の姿勢を前面に出していた。

3. 八田と協会

古川勝三の『台湾を愛した日本人』の記述とは違い、彼は協会設立唯一の中心人物ではないし、初代会長にもなっていないものの、中心メンバーの一人であった。一時をのぞいて常に理事や協会幹部の立場にあり、1940年4月からおよそ1年間会長を務めている。表1に会長の一覧を、表2に八田がつとめた協会役職を示した。

表1 台湾技術協会会長一覧

初代	松本虎太
2代	井手薫
3代	澁谷紀三郎
4代	中澤亮治
5代	素木得一
6代	八田與一
7代	速水和彦

表2 八田與一協会役職一覧

理事	1936年7月~1937年3月
理事	1937年3月~1938年1月
理事	1938年9月~1939年2月
副会長	1939年2月~1940年4月
会長	1940年4月~1941年2月
顧問	1941年2月~1942年5月(殉職)

八田が協会にかける期待は大きかった。昭和16年2月に開かれた通常総会で八田は会長を退任し、顧問に就任することになる。総会での発言で八田は、戦争で不可欠な生産増加に技術者の発言権が与えられていないことを指摘し、(台湾)技術協会を作って技術者の力をつけようとしたと述べている。そして「少しも之は実現されて居りません」と不満を述べると共に、「必ずや近い将来に実現するものと私は考える」と、これからの期待している。だが八田にはあまり時間が残されていなかった。総会の1年3ヶ月後、任務でフィリピンに向かう途中乗船の大洋丸がアメリカ海軍の潜水艦に撃沈され殉職した。

キーワード 台湾技術協会, 日本技術協会, 協会幹部, 技術評論, 技術者の地位

連絡先 〒292-0041 千葉県木更津市清見台東2-11-1 木更津高専人文学系 TEL0438-30-4055

4. 日本技術協会への合流における八田

台湾技術協会が独自で活動した時期は短かった。日本技術協会との合流の話が持ち上がったのは設立3年目の1939年(昭和14年)である。どちらが提案したのかはわからないが、宮本武之輔など日本技術協会の主要メンバーが技術者の大同団結を目指し積極的な活動を行っていた時期にあたる。この年の12月5日の理事会において提議され、翌1940年(昭和15年)1月27日に開かれた臨時総会で報告された。八田は合流に積極的に動いている。1939年に日本の東京(6月に日本技術協会員と座談会を開いた記録がある)である程度話しをまとめ、1月の総会では議長を務め、年会費減額と日本技術協会への合流を提案し了承されている。記録通りなら全112行のうち98行を八田議長が一人で喋っていることになり、かなり強引な議事進行という印象を受ける。結果として協会は組織を残すと共に、日本技術協会台湾支部として活動し、『台湾技術協会誌』は停刊し、日本技術協会発行の『技術評論』が台湾技術協会員に送付されることとなった。

合流はともかく『台湾技術協会誌』の停刊に反対がなかったのは不思議であるが、発行年数が短いだけに愛着や存在意義を感じる人が少なかったかもしれない。八田について見てみよう。表3と表4が、八田が『台湾の水利』と『台湾技術協会誌』に寄稿した記事・論稿である。『台湾の水利』の方が専門的な知見を述べている。表3の⑩と表4の⑨は、内容が全く同じである。八田にとって『台湾技術協会誌』は不可欠な存在ではなかったろう。

日本技術協会が発行する『技術評論』は、当時の日本における技術情報を知る上では最適な雑誌であり、これを読むことができることで満足した人は多かったと思われる。ただ、『台湾技術協会誌』の最終号となる第3輯第6号の編集後記で、今後台湾支部の活動は『技術評論』誌上で通知されるとあるが、それは一切なかった。約束違反があったか編集後記の間違いかは分からないが、協会の活動が伝わらないという不満はあったであろう。1942年(昭和17年)11月、台湾技術協会は雑誌『進歩』を発行するが当然八田は関わっていない。

表3 八田の論稿(『台湾の水利』)

タイトル	年
①セメントに就て	1931
②水利と土壌改良	1934
③二十米及十五米堰堤標準断面及築造法	1934
④貯水池の水位急降下によるベルツ・オーチダムの盛土滑動に就て	1934
⑤福建省管見	1936
⑥土地改良事業の基本計画に就て	1937
⑦濁水溪分水協定と日月潭	1937
⑧ポルターダム用マスコンクリートの特性	1937
⑨海口に於ける氣象より見たる海南島西部の農業	1939
⑩土地改良事業に就て	1940
⑪年頭の辭	1940
⑫臺灣土木事業の今昔	1940
⑬海南島の現状を語る	1941

表4 八田の論稿(『台湾技術協会誌』)

タイトル	年
①福建省視察	1937
②福建省土地改良其の他に關する視察報告書	1937
③世界の堰堤	1937
④時事断片	1938
⑤土木の常識	1938
⑥断片	1938
⑦時事断片	1939
⑧断片	1939
⑨年頭の辭	1940
⑩支那産業の開発	1940
⑪覚悟	1940
座談会・臺灣に興し得べき工業	1938
座談会・新東亞建設と技術座談會	1939

5. まとめ

日中戦争の直前、技術者の団結と地位向上を目的として台湾技術協会が設立され、数年後日本の技術者が大同団結するために台湾技術協会は日本技術協会に合流した。そのいずれにも八田與一は深く関わっており、八田が台湾技術者の中心的存在であったことが改めて確認できる。

参考文献

蔡龍保「日本統治時代後期における台湾技術協会の設立とその事業-台湾島内の研究, 調査活動を中心に-」松田吉郎編著『日本統治時代台湾の経済と社会』晃洋書房, 2012年, pp. 204-26.